

# 日本語とトルコ語の受動文について

デニズ・ビョケソイ

キーワード：受動文、有生ヒエラルキー、格形式、動作主マーカー

## 1. はじめに

本稿では日本語とトルコ語の受動文の特性について比較対照を行い、両言語の受動文の間に見られる際立った相違点を明らかにすることを目的とする。これまで日本語とトルコ語の体系的な対照研究は極めて少なく、その中でも受動文に関する対照言語学的な考察は、管見の限り見あたらない。そこで本稿では、受動文の成立に関与すると考えられる二つの側面に焦点を当て、両言語の受動文の特性を記述的な観点から考察していくことにする。

まずここで注目する点の一つは、能動文から受動文へのヴォイス転換において受動文に主語になることのできる能動文の要素の格形式である。トルコ語においては、受動文の主語になる要素は能動文の対格名詞句に限られている。これに対して、日本語では、対格名詞句以外にも与格名詞句、所有格名詞句の所有者、さらには能動文に現れない要素まで受動文の主語になることが可能である。もう一つの相違点は、日本語では格形式による制限はトルコ語に比べて厳しくないが、これらの様々な要素が受動文の主語になるためには、その要素の語彙的特徴（[±有生]）が重要であるという点である。日本語と異なり、トルコ語の場合、このような制限は見られない。すなわち、[一有生]の主語の受動文が非文になる例は日本語に存在するが、トルコ語には見られない。

さて、対照研究の出発点として、「何を受動文と捉えるか」ということが問題になるが、本研究では、以下の二つの特徴がある文を受動文と考える。

1. 文の動詞が、独特の形を持つ（日本語では *rare*、トルコ語では *il*）
2. 文の主語が、動作主ではない

1で示した形態素はどちらの言語においても、いわゆる受動文以外にも見られる形態素である。トルコ語の場合 *il* は再帰文にも現れ、日本語の場合 *rare* は可能形や尊敬語形式文として用いられることがある。このように、同じ形態素で別の意味を表すといった曖昧性を避けるためには、2

の条件が必要となる。

## 2. 受動文の主語

文のレベルで見た場合、動作に関わる要素の中からどれが受動文の主語になり得るかについて、主に二つの制限があると考えられる。一つは主語になるものの語彙的特徴で、もう一つは能動文から受動文にかけてどの格形式から主格化するかということである。日本語では前者が制限になるが、トルコ語では後者の制限が厳しいと考えられる。

### 2. 1. 主語の語彙的特徴

日本語では、主語が [+有生] あるいは [+人間] である受動文が多いことがこれまで指摘されている。能動文の対格目的語が受動文の主語になった場合、[-有生] の主語の受動文も可能ではあるが、特に間接受動文や持ち主受動文では、基本的に人間以外の主語は許されない。

- (1) a. 尚子の本が盗まれた。(直接受動文)
- b. 尚子が本を盗まれた。(持ち主受動文)
- (2) a. ドアのノブが盗まれた。(直接受動文)
- b. ドアがノブを盗まれた。(持ち主受動文)

(1) は直接受動文も持ち主受動文も許されるのに対して、(2) は持ち主受動文しか許されない。この原因として、文の主語における語彙的特徴 [+人間] が関与していると考えられる。Siewierska (1984) では、主題になるものには以下のようなヒエラルキーがあると指摘している<sup>2)</sup>。

<u>[+有生] のヒエラルキー</u>		
[+人間]	>	[-人間]
一人称 > 二人称 > 三人称		有生 > -有生

日本語の受動文を見ると、動作と主語の関係が直接的であればあるほど、上のヒエラルキーの左側から右側まですべて可能であるが、その関係が間接的になればなるほど、主語になり得るのは左側になるようである。本研究では、日本語の受動文における動作と主語の関係の直接さを、格形式にしたがって以下のように考える。

受動文の主語が能動文で対格名詞句として現れる

例：太郎が 次郎 を 殺す  
次郎 殺される

受動文の主語が能動文で与格名詞句として現れる

例：太郎が 次郎に 怒る  
次郎が 怒られる

受動文の主語が能動文で対格名詞句の一部として現れる

例：太郎が 次郎の犬 を 殺す  
次郎が 犬を 殺される

受動文の主語が能動文で与格名詞句の一部として現れる

例：太郎が 次郎の妹に 怒る  
次郎が 妹に 怒られる

受動文の主語は動作が能動文で語られた場合現れない

例：赤ちゃんが 泣く  
太郎が 赤ちゃんに 泣かれる

直接的



間接的

したがって、動作と主語の関係が最も間接的である間接受動文の場合、主語が左側の人間に限られている。また、[±人間]の要素の中では、一人称の方がより主格になりやすい。これに対して、直接受動文の場合、[±有生]あるいは[±人間]による制限は厳しくない。ただし、直接受動文の場合も、対格名詞句と与格名詞句の能動文の受動化を比べると、ヒエラルキーによる制限が異なるのではないかと考える。

- (3) a. 先生が太郎の言葉に怒った。  
b. \*太郎の言葉が先生に怒られた。
- (4) a. 先生が太郎の言葉を繰り返した。  
b. 太郎の言葉が先生に繰り返された。
- (5) a. 先生が太郎に怒った。  
b. 太郎が先生に怒られた。

(3) と (4) を比べると、両方の場合も受動文の主語が [−有生] である。しかし、受動文の主語が能動文で対格名詞句として現れる場合、受動化は可能であるが、与格名詞句で現れる場合、受動文は非文になる。また、(3) と (5) を比べると、両方とも受動文の主語が能動文では与格形式で現れるが、主語が [−有生] である (3) b は非文になり、主語が [+有生] である (5) は自然である。

これに対して、トルコ語の場合、このような制限は見られない。すなわち、能動文では動作の対象になるものが与格名詞句で、[-有生]である場合も受動化は可能である。以下の(6)は、日本語の(3)に相当する。

- (6) a. Hoca  $\phi$  Ali'nin sözleri -ne kız -dı.  
先生 主格 アリの言葉 与格 怒る 定過去

(先生がアリの言葉に怒った)

- b. Ali'nin sözleri -ne kız -ıl -dı.<sup>3</sup>  
アリの言葉 与格 怒る 受動 定過去

(\*アリの言葉が怒られた)

日本語の(3) (b) は非文になるが、トルコ語の(6) (b) が非文にはならない。しかし、トルコ語の受動文には、日本語との相違点が見られる。受動化は可能であるが、能動文の与格が受動文へのヴォイス転換において格形式が変わらない。なぜならばトルコ語の受動文では、主格化する名詞句が、能動文の対格名詞句に限られている（このことについては次節で述べる）。この点で、日本語の対格名詞句が主格化する受動文と同様に、ヒエラルキーによる制限は厳しくない。

## 2. 2. 受動文の主語の能動文における格

受動文に対応する能動文を見ると、前に述べたように、トルコ語では、能動文の対格以外の目的語は受動文の主語になり得ない。能動文の対格名詞句が受動文の主語になる場合、トルコ語と日本語の文構造には類似点が見られる。すなわち、語順変化と格形式の変化は両言語において同様である。

- (7) a. Ali  $\phi$  Hasan 'ı öldür -dü.  
アリ 主格 ハサン 対格 殺す 定過去

(アリがハサンを殺した)

- b. Hasan  $\phi$  Ali tarafından öldür -ül -dü.  
ハサン 主格 アリ マーカー<sup>4</sup> 殺す 受動 定過去

(ハサンがアリに殺された)

しかし、このように類似するのは、対格が主格化する場合に限られている。授受動詞が受動化する場合には、明らかに違いがある、日本語では、(8) a は (8) b にも (8) c にもできるといったように、目的語が両方とも受動文の主語になり得る。

- (8) a. 太郎が花子に花を送った。  
 b. 花が太郎から花子に贈られた。  
 c. 花子が太郎に花を贈られた。

これに対して、トルコ語は受動文の主語になるのは対格名詞句である。(9) a を (9) b のようにすることはできても、(9) c のようにはできないのである。

- (9) a. Ali  $\phi$  Ayşe 'ye çiçeğ -i gönder -di.  
 アリ主格 アイシエ 与格 花 対格 送る 定過去  
 (アリがアイシエに花を送った)
- b. Çiçek  $\phi$  Ayşe 'ye Ali tarafından gönder -il -di.  
 花 主格 アイシエ 与格 アリ マーカー 送る 受動 定過去  
 (花がアイシエにアリから送られた)
- c. \*Ayşe  $\phi$  Ali tarafından çiçeğ -i gönder -il -di.  
 アイシエ主格 アリ マーカー 花 対格 送る 受動 定過去  
 (アイシエがアリから花を送られた)

また、(9) b の場合、Ayşe'ye は格の面では昇格しないが、(9) d のように文頭の位置 (主語の前) に置くことができる。しかし、この受動文では、主語以外の部分を明示しないことは (9) c のように可能であるが、(9) f のように主語の çiçek を明示しないと不自然になる<sup>5</sup>。

- (9) d. Ayşe 'ye çiçek  $\phi$ , Ali tarafından gönder -il -di.  
 アイシエ 与格 花 主格 アリ マーカー 送る 受動 定過去  
 (アイシエがアリから花を送られた) ((9) b の語順を変えた例)
- e. Çiçek  $\phi$  gönder -il -di.  
 花 主格 送る 受動 定過去  
 (花が送られた)
- f. ??Ayşe 'ye Ali tarafından gönder -il -di.  
 アイシエ 与格 アリ マーカー 送る 受動 定過去  
 (アイシエがアリによって送られた)

授受動詞以外に、与格名詞句しか目的語をとらない動詞はあるが、トルコ語と日本語において、これらの動詞の受動化には以下のような相違点と類似点が見られる。本研究では、このような動詞を「与格動詞」と呼ぶことにする。与格動詞は、トルコ語も日本語も受動化は可能である。

- (10) a. Ali  $\phi$  Ayşe'ye laf at -tı.  
 アリ主格 アイシエ与格 話しかける 定過去

(アリがアイシエに話しかけた)

- b. Ayşe'ye (Ali tarafından) laf at -ıl -dı.  
 アイシエ与格 (アリマーカー) 話しかける 受動 定過去

(アイシエがアリに話しかけられた)

- (11) a. 太郎が花子に話しかけた。

- b. 花子が太郎に話しかけられた。

与格名詞句が主格化するの、日本語だけである。そこで日本語において、対格と与格は、主格化する点で構文上の相違点は見られないと考える。これに対して、トルコ語では、(10) b のように Ayşe'ye が Ayşe になるといったように主格化は起こらないが、受動化が可能である。

ここで生じる一つの問題は、(10) b の Ayşe'ye という与格名詞句は主語ではないかという問題である。格形式が与格であっても、主語である可能性は十分に考えられる。(10) b の Ayşe'ye が文の主語ではないもう一つの証拠として、動詞との一致があげられる。トルコ語では、(10) のように主語が三人称である場合、動詞と人称の一致を示す形態素はないが、主語が一人称である場合、動詞が与格名詞句と一致しないことが明らかである。

- (12) a. Hoca  $\phi$  bana kız -dı.  
 先生 主格 私 与格 怒る 定過去

(先生が私に怒った)

- b. Bana kız -ıl -dı.  
 私 与格 怒る 受動 定過去

(私が怒られた)

- c. \*Bana kız -ıl -dı -m.  
 私 与格 怒る 受動 定過去 一人称

(私が怒られた)

このような受動文を、Sultanov (1997) は「öznesiz」と呼んでいるが、本研究では、その日本語訳となる「非主語受動文」という用語を使う。トルコ語の文構造において、文に主語を明示しないことは可能である。しかし、非主語受動文は、主語が明示されていないが、文の意味から主語の存在が明確である文と異なり、主語の位置に立つ要素が存在しない文である。

トルコ語の「非主語受動文」は、与格目的語しか持たない能動文から作られた文に限られない。それ以外にも、目的語を持たない自動詞の受動化も可能である。

- (13) Sevgisiz yaşa -n -ma -z.  
愛なし 生きる 受動 否定 アオリスト

(愛がないまま生きることは(誰にも)できない)

この文は、動作を実行する要素ではなく、動作そのものが問題になる文である。Balınar (1981) はこのような文では、主題化するのは動詞であると述べている。しかし、自動詞の受動化の動機は動詞の主題化に限られていない。例えば(14)のように、場所格が現れる場合、文は動作ではなく動作の場所について語られることもある。

- (14) Böyle yer -de uyu -n -ma -z.  
こんな所 場所格 眠る 受動 否定 アオリスト

(こんな所で眠るはずはないでしょう)

非主語受動文の場合、動作主や動作を受ける要素の存在が問題にならないため自動詞の受動化は可能である。また、テンスは一般の受動文と異なり現在形、特にアオリストの方が自然である。さらに、この形では、否定文が多く見られる。Sultanov (1997) は、これらの受動文を、与格受動文と同様で、非主語受動文と説明している。両方の場合も、文の主語になる要素が存在しないということは明らかであるが、自動詞の受動文と与格動詞の受動文の間に様々な相違点が見られる。まず、テンスや否定・肯定の面では、与格受動文はむしろ対格名詞句が主語になった受動文に似ている。また、動作の対象が文の主題になるという点でも、与格受動文は、自動詞の受動文と異なる。したがって、目的語を持たない動詞と与格動詞を、受動化に関して区別する必要があると考える。

しかし、このような文が受動文に属さないのであれば、なぜ受動形態素が用いられるかを説明しなければならない。また、以下の(15) a と b は、意味は同様であるが、b は主語を持つという相違点がある。

- (15) a. Böyle yüz -ül -ür.  
このように 泳ぐ 受動 アオリスト

(このように泳ぐべきだ)

- b. Yüzme işi  $\phi$  böyle yap -il -ir.  
泳ぐこと主格 このように する 受動 アオリスト

(泳ぐことはこのようにすべきだ)

日本語の受動文の主語になり得る要素の中には、いわゆる持ち主受動文の主語がある。この場合、能動文の目的語が所有格で、所有者は受動文の主語になる。このような文が成り立つには、主語化するものとその所有物との関係が重要である。また、持ち主受動文は、直接受動文で表現できる文もあるし、表現できない文もあるが、その違いが文中の要素の語彙的特徴によって決められる。

- (16) a. 洋子は花子の兄を殺した。  
b. 花子の兄は（洋子に）殺された。  
c. 花子は兄を（洋子に）殺された。
- (17) a. 次郎は太郎の足を踏んだ。  
b. ?太郎の足は（次郎に）踏まれた。  
c. 太郎は足を（次郎に）踏まれた。
- (18) a. 泥棒は太郎の財布を盗んだ。  
b. 太郎の財布は（泥棒に）盗まれた。  
c. 太郎は財布を（泥棒に）盗まれた。

(16) ~ (18) の例文では、所有物の [±人間] の特徴による制限はないように思われる。「かばん」が主語になり得るが「足」が主語になった文は不自然になるということは、所有者と所有物の関係に関わってくる。そこで、日本語において、少なくとも持ち主受動文の場合、[±人間] 以外の語彙的特徴も受動化に影響することが明確である。その例として、持ち主受動文における、体の部分が所有物になった文がある。

一方トルコ語においては、持ち主受動文のような文構造は存在しないが、持ち主受動文と相当関係を持つと思われる受動文がある。日本語の (18) の受動表現に対応する表現は、トルコ語の場合二つ考えられる。(19) a は日本語の直接受動文と同様である。そして b は、動詞が使役形態素を伴う。



- (19) a. Taro'nun cüzdan-ı  $\phi$  çal -ın -dı.  
 [ 太郎 属格 財布-限定接辞 ] 主格 盗む 受動 定過去

(太郎の財布が盗まれた)

- b. Taro  $\phi$  cüzdan -ı -m çal -dır -dı.  
 太郎主格 財布 限定接辞 対格 盗む 使役 定過去

(太郎が財布を盗まれた)

(19) b の場合、財布が盗まれたことは太郎の意識外に行われ、その結果として太郎が影響をうけたという意味が生じる。本研究では、このような文を「使役構造受動文」と呼んでおく。使役構造受動文は、望ましくない結果を表すものに限られている。このような文は、構造は使役文と変わらないので、望ましい結果を表す場合には、文の意味が使役になる。

日本語では、動作に直接参加しない要素が受動文の主語になる文、いわゆる間接受動文がある。文の要素の数が一つ増えるという点で間接受動文は使役文に近い構造を持つ。トルコ語では、このような構造はない。したがって、日本語の間接受動文に相当する文は普通、二つの文で表される。

そこで、日本語とトルコ語の受動文は、能動文の対格名詞句が受動文の主語になる場合には類似するが、それ以外の受動文では相違点が多いと考えられる。動作を受ける要素が与格形式で表される場合、両方の言語とも受動化は可能であるが、主格化は日本語の場合だけに可能である。また、日本語もトルコ語も自動詞文の受動化は見られるが、その結果はトルコ語では非主語受動文になり、日本語では間接受動文になる。

### 3. 能動文の主語

日本語もトルコ語も、すべての受動文に起こることは、能動態の主語として動作を行う要素、いわゆる動作主が、受動文の主語にならないことである。また、両言語とも、降格された動作主が受動文に現れない場合の方が多い。特に、トルコ語においては、動作主を表さない傾向が日本語に比べて強いと思われる。

動作主が受動文に現れる場合、どのマーカーで明示されるかは、両方の言語でも様々である。日本語において、一番多く用いられる動作主マーカーは与格「に」である。日本語の与格が受動文に動作主を示すことは、多くの受動文に可能である。ただし、他の動作主マーカーがより適当な場合もある。例えば、文の中に他の与格が現れる (20) のような文では、与格が動作主マーカー

一として不適當になる。

- (20) a. 太郎は花子にその本を渡した。  
b. その本は太郎 (\*に／から) 花子に渡された。

日本語の受動文において、動作と主語の関係が間接的であればあるほど、主語が〔+人間〕に限られるとともに、文に動作主が明示される可能性が高くなると思われる。間接受動文では、動作主が明示された文の方が自然で、動作主が与格によって明示されることが一般的である。

- (21) a. 鈴木さんは奥さんに死なれた。  
b. \*鈴木さんは死なれた。  
c. \*鈴木さんは奥さんによって死なれた。

トルコ語において、非常に限られた数の受動文では与格が動作主を示すために用いられることはあるが、これは動作主より動詞の語彙的特徴に関わるように思われる。この場合の動作には「負ける、捕まれる」といったの意味を含み、能動文では与格名詞句をとらない (22) (23) で示すような動詞に限られる。

- (22) Ahmet  $\phi$  para çalarken Ayşe ye yakala -n -dı  
アームット主格 お金を盗むところ アイシエ 与格 捕まえる 受動 定過去

(アームットがお金を盗む所アイシエに捕まった)

- (23) A takımı  $\phi$  B takımı -na yen -il -di.  
A チーム主格 Bチーム 与格 勝つ 受動 定過去

(A チームがBチームに負けた)

日本語では、与格以外に一番多く用いられる助詞が「ニヨッテ」であり、普通は、主語が〔-人間〕で、動作主は〔+人間〕である場合に用いられる。

- (24) アメリカ大陸がコロンブスによって発見された。

- (25) 書類が管理者によって配られた。

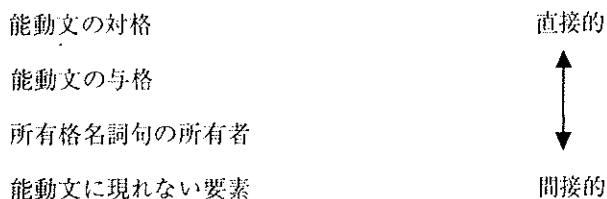
ここで日本語とトルコ語との類似点の一つは、日本語では与格よりニヨッテが自然に用いられる文に対応するトルコ語受動文では、一般的な傾向と異なって、動作主が文に明示されることが

自然になるという点である。トルコ語では、受動文に用いられる動作主マーカ―は *tarafından* である。しかし、動作主を示さない方が自然であるので、この動作主マーカ―が使われる受動文は数少ないのである。さらに、口語より書き言葉の方に多く用いられるという点でも、トルコ語の *tarafından* と日本語のニヨッテは類似点を持つ。ただし、*tarafından* の選択はニヨッテの選択に相当しない文が多い。

(26) Taro 'nun para -sı φ Jiro tarafından çal -ın -dı.  
 [太郎-所有格 お金-限定接辞] 主格 次郎 マーカ― 盗む 受動 定過去

(太郎のお金は次郎 (に/??によって) 盗まれた)

さて、動作主が明示されることに関して、日本語では、トルコ語の受動文に見られない一つの規則性が目立つ。前節で述べたように、日本語の受動文を、主語と動作の関係が一番直接的の文から最も間接的の文まで並べてみると、以下のようになる。



これを、動作主の明示化という点で見ると、上から下にかけて、動作主が明示される可能性が高くなる。主語と動作の関係が最も間接的である場合、動作主が現れないと不自然になる文もある。これは、動作主が動作と主語の関係を説明する部分であるため、文に明示されないと、文の情報が足りなくなるからだと考えられる。したがって、日本語では、自動詞の受動文では動作主が現れることが多い。これに対してトルコ語の自動詞受動文では、動作主が明示されないことが自然で、テンスが現在であれば、一般的には (27) のように動作主が存在が文から完全になくなる。

(27) Böyle yer -de uyu -n -ma -z.  
 こんな所 場所格 寝る 受動 否定 アオリスト

(こんな所で寝るはずがない)

日本語とトルコ語の受動文で動作主を明示するかどうかという観点から比べると、動作主を明示しない傾向がトルコ語において日本語と比べて強いと考えられる。一般的に、日本語において動作主を明示することが構文上に不可能な受動文は存在しない。これに対して、トルコ語におい

では、日本語にあるように動作主を示さないと不自然になる受動文は存在しない。また、日本語では動作主や受動文の主語の〔±有生〕が動作主マーカ―の選択に影響するが、トルコ語にはこのような傾向は見られない。

#### 4. 終わりに

日本語とトルコ語の受動文の特徴を比べて見ると、多くの場合、受動文が用いられる制限や動機が異なるようである。本研究では、日本語とトルコ語の受動文を、文で語られている動作に関わる要素の語彙的特徴、そして格形式を中心に対照した。

日本語とトルコ語の受動文の主語になる要素を格形式という観点から比べると、トルコ語では能動文の対格目的語以外のものは受動文の主語にならない。しかしこれは、トルコ語では対格目的語が主語になった文以外の受動文はないことではない。与格名詞句しかとらない動詞や目的語を持たない自動詞も受動化は可能である。こうした場合、主語になり得る要素は存在しないため、文は非主語文になる。これに対して、日本語では、受動文の主語になるためには、格形式による制限はないと思われる。対格名詞句、与格名詞句、また所有格名詞句の所有者が主語になり得るほか、さらに能動文に現れない要素も受動文の主語になり得る。

日本語では、受動文の主語になるために格形式に制限は厳しくないが、主語になる要素の語彙的特徴〔±有生〕が問題になる。日本語の受動文は、一般的に主語が〔+有生〕である文が多いのではないと思われる。ただしこれは〔-有生〕の要素が受動文の主語になり得ないということではなく、受動文の主語が能動文の対格目的語であった受動文では、主語が〔-有生〕の場合も可能である。しかし動作と主語の関係が間接的であればあるほど、〔+有生〕の主語の可能性が多くなり、間接受動文や持ち主受動文の場合、〔-有生〕の主語は許されない。

このような傾向はトルコ語の受動文では見られない。しかしここでは、トルコ語の受動文において、受動文には主格で現れる要素が能動文の対格名詞句に限られているという点が重要である。日本語の場合も、能動文の対格名詞句が受動文の主語になるには、〔±有生〕による制限は厳しくないもので、両方の言語の、能動文の対格名詞句が受動文の主語になった文だけを捉えた場合、語彙的特徴による制限は、相違点が見られない。日本語とトルコ語の受動文の主な相違点は、日本語では、主語の主語の語彙的特徴による選択が格形式による選択より重要であるの対して、トルコ語ではその逆、すなわち、格形式による選択は語彙的特徴による選択より重要であるというこ

とである。

#### 【注】

- 1 日本語もトルコ語もこれらの形態素の異形態素は存在する
- 2 Siewierska は主題を「文頭に現れる、談話においてすでに情報が挙げられた要素」と定義している。
- 3 動作主を明示しない文の方が自然なので、これらの文は日本語のとその点で異なる。
- 4 例文に現れる「マーカ―」は「動作主マーカ―」を省略したものである。ただし与格が動作主マーカ―として用いられる場合、「与格」と示す。
- 5 トルコ語では、主語が明示されない文は自然である。

#### 【参考文献】

- 石綿敏雄・高田誠(1996)『対照言語学』おうふう社  
奥津敬一郎(1983)「何故受身か?」『国語学』132  
久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店  
\_\_\_\_\_(1983)『新日本文法研究』大修館書店  
工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」『ことばの科学4』むぎ書房  
佐伯哲夫(1987)「受動態動作主マーカ―考 (上)」『日本語学』6-1  
佐伯哲夫(1987)「受動態動作主マーカ―考 (下)」『日本語学』6-2  
杉本 武(1991)「二格をとる自動詞―準他動詞と受動詞―」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版  
砂川有里子(1984)「<に受動文>と<によって受動文>」『日本語学』?? 明治書院  
高橋太郎(1985)「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4 明治書院  
高見健一(1995)『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版  
張麟声(1997)「受動文における動作主明示・不明示の構文的規則について」『日本語学』16-2 明治書院  
益岡隆志(1982)「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82  
\_\_\_\_\_(1991)「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版  
松谷浩尚(1990)『トルコ言語学概論』泰流社  
村本新次郎(1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版  
鷲尾龍一・三原健一(1997)『ヴォイスとアスペクト』研究社  
Aksan, Y. (1997) *Konu Yorumu ve Türkçe'de Kimi Geçişsiz Eylemler* Dilbilim Araştırmaları, Kekiceğ  
Bada, E., Bedir, H (1998) *Türkçe'de edilgen çatının kullanım sıklık ve alanları* 12. Dilbilim Kurultayı Bildirileri, Mersin Üniversitesi  
Balpınar, Z. (1981) *Turkish Passives: Morphosemantic and Syntactic Considerations* University of Florida  
Banguoğlu, T. (1998) *Türkçenin Grameri* Türk Dil Kurumu  
Comrie, B. (1988) *Passive and Voice* Typological Studies in Language 16 John Benjamins Publishing Company  
Demircan, Ö. (1993) *Türkçe'de Çatılm ve Edilim* VII. Dilbilim Kurultayı Bildirileri, AÜDTCF yay.  
Gulensoy, T. (1995) *Türkçe'de edilgen çatının grameri nasıl yazılmalıdır?* Türk Gramerinin Sorunları Toplantısı, 1995  
Hopper, P.J. & Thompson S.A. (1980) *Transitivity in grammar and discourse* Language 56.2  
Howard, I. and Niyekawa-Howard, A.M. (1976) *Passivization Syntax and Semantics: Japanese Generative Grammar* Academic Press  
Kahraman, T. (1996) *Çağdaş Türkiye Türkçesindeki Fiillerin Durum Ekle Tamlayıcıları*, TDK  
Keenan, E. L. (1985) *Passive in the world's languages* Language Typology and Syntactic Description vol 1, Shopen T. ed. Cambridge UP  
Kuribayashi, Yu (1989) *Accusative marking and noun-verb constructions in Turkish* Gengo Kenkyu 95  
Kuroda, S. (1979) *On Japanese Passives* Explorations in Linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue, Kenkyusha  
Kuno, S. (1973) *The Structure of Japanese Language* MIT Press  
Özsoy, S. (1990) *Edilgen Yapı* IV. Dilbilim Sempozyumu Bildirileri, Boğaziçi Üniversitesi

- Fredmutter DM and Postal PM (1983) *Toward a Universal Characterization of Passivization* Studies in Relational Grammar The University of Chicago Press
- Siewierska, A. (1984) *The Passive: A Comparative Linguistic Analysis* (Linguistik Aktuell) Helin
- Shibatani, M. (1985) *Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis* Language 61
- Soltanov, N. (1997) *Türkçe de pasif yapıların tipleri VIII* 4. Uluslararası Türk Dili Bilimi Konferansı, AÜ Baskıya
- Washio, R. (1993) *When Causatives Mean Passive: A Cross-linguistic Perspective* Journal of East Asian Linguistics 2
- ..... (1995) *Interpreting Uvea Kaitakusha*